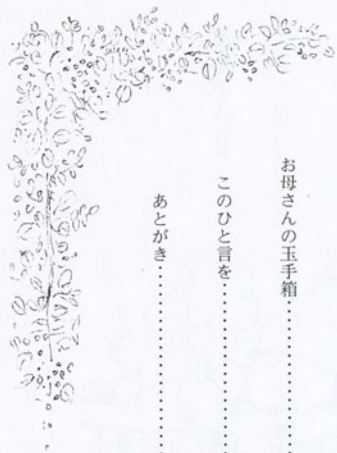


なつちゃん の家


あんぱいこう



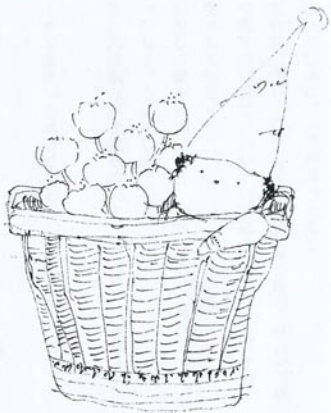


裕介 <small>ゆうすけ</small> のこと	79
「ユア・ポップハウス」の友人たち	87
お母さんの玉手箱	105
このひと言を	127
あとがき	132

菜摘 <small>なつ</small> 子の一日	5
事故のあとさき	19
涙 <small>なみだ</small> の捨て場教室	33
メリーゴーランドのお姫 <small>ひめ</small> さま	49
大輔 <small>だいすけ</small> の作文	63



菜摘子の日



装幀・カット
ブックデザイン
● ●
中島祥子 松永禎郎

「おはよっ！ なっちゃん、朝だよ。」

お母さんの大きな声といっしょに、ドアがぱつとあく。

時間はいつも決まって六時。冬だったら、雪国はまだ真っ暗だ。けれど、早起きのお母さんが台所で動きだす音で、たいていは起こしてもらおう三十分まえから、わたしは目を覚ましている。

お母さんはベッドのわたしに顔を近づけると、大声でまた「おはよっ！」

——聞こえてますよっ、もー、うるさいんだからー。

とは思っても、お母さんの元気な声を聞かないと、やっぱり^{なっ}菜摘子の一日^はははじまらない。

お母さんは、窓のカーテンをさつとあけるとわたしの右手をとって、

「お・は・よっ！」

と耳もとで三度目のごあいさつ。そして手をギュッとにぎって、腕^{うで}がちぎれそうなほど強く振る。

——いつたいなあつ。

毎朝そう思うけど、右手は、わたしのからだのうちでわずかに動かすことのできるたったひとつの部分。お母さんにしてみれば、これは大切なボディークミュニケーションなのだ。おかげで、ほんやりとしていたわたしの頭のなかもすつきりする。

それからお母さんはわたしの両わきに腕を入れて「よっこらしよっ」と掛け声をかけ、まくらからずり落ちたわたしを元にもどしてくれる。そして足のふとんをめくると、手早くおしめを替える。

ときどきお母さんがくるまえに、

——ウーッ、ウーッ、ウーッ。

と大声でサイレンを鳴らす。これは、早くおしめを取り替えてほしいときだ。

お母さんは、手をにぎっただけでわたしのことがわかるという。にぎった

ときの反応や、寝相の悪さ、うめき声が強いか弱いか、おしつこの量や色などでも、今日一日のわたしのきげんや体調がわかるなんて、ほんとかしら。

ま、そういえば、わたしだって、お母さんの手のあたたかさや強さで、お母さんのその日のごきげんは、だいたいわかるもんね。

熱いタオルで顔をふいてもらったあと、朝ごはん。

食べるものは家族と同じだけれど、わたしの食事はちよつと凝こっていて、どれも細かくきざみである。このきざみ食とおかゆや牛乳を、お母さんがたつぷり時間をかけてスプーンで食べさせてくれる。

朝ごはんが終わると、わたしはまた眠ねってしまふ。朝のたったこれだけのことで、ぐつたり疲れてしまうのだ。目を覚ますことも、食べることも、おしめを替えてもらうことも、体力をとて消費しょうぎするので、もうへとへと。お母さんもへとへとだと思う。

週に三回、朝の九時に、車に乗せてもらって五キロほど離れた福祉作業所
にでかける。もちろんお母さんもいっしょだ。

「なっちゃん、今日も一日、どうぞよろしく。」

とお母さん。

——こちらこそ、どうぞよろしく。

作業所には、わたしと同じように障害をもった仲間たち十人ほどが、それ
ぞれお母さんに付き添われてきている。自分では動くことも話すこともでき
ないわたしは、車いすの上でポーツと寝ているだけ。でも同じ年ごろの仲間
たちがいっぱいいて、元気に走りまわったり、もくもくと作業をしたりする
のを見ているだけで、けっこう楽しい。

お母さんも作業所に行くのを楽しみにしている。お母さん同士、子どもの
作業を手伝いながら世間話をしたり、障害のある子をもった親の悩みを打ち
明け合ったり、情報交換をしたりで気分転換になるらしい。作業所はいつも

にぎやかで、お母さんたちの笑い声が絶えない。

はじめはわたしが作業所に通うことに、家族は反対だった。人が大ぜいい
るところには雑菌がたくさんいるから、からだに免疫のないわたしはすぐ病
気にかかってしまうだろう、というのだ。それは入院につながり、悪化する
と死んでしまうおそれだつてある。だから、家のベッドにじつとしているの
がいちばん、というわけだ。

でも、家で一生寝たきりですごすなんて、考えただけでもわたしには耐え
られない！ きつと、介護してくれるお母さんは、もつとつらいと思う。わ
たしより先にまいてしまうかもしれない。

「環境が変われば、なっちゃんもわたしも元気が出るから……。」

と、お母さんがしんほう強く主張して、作業所通いがはじまったのだった。

作業所に行かない日は、お昼ごはんや薬を飲むとき以外、ほとんどベッド

でうつらうつら。そんなとき、近所の人が遊びにきたりすると、お母さんはお客さんをわたしの部屋に連れてきて、お茶を飲みながらおしゃべりする。わたしも仲間に入れてくれるってわけ。

でも、正直いうと、わたしは眠くて眠くてたまらない。

事故の後遺症で、はじめのころは日に五、六回ひどい発作が起こった。とつぜんバーンとからだが硬直して目が引きつってしまふ。自分の意思とは関係なしに、からだがかべつの上で躍りだしたり、信じられないほどの力で物をはねのけたりしてしまふらしい。そのため、打ちどころが悪くて生傷が絶えなかった。

この発作が起こらないようにと手術もしたけれど、うまくいかなかった。お医者さんと相談して、発作をおさえる薬を飲むことにした。強い薬なので、それからは大きな発作は起こらなくなったけれど、一日じゅう眠くてしょうがない。眠いのは、薬の副作用なのだ。

この薬を飲むことでは、家族がみんな何度も話し合った。この薬を飲まなければ、わたしは感情をいくらか顔やからだであらわすことができた。うれしいときは喜んだり、悲しいときは悲しい表情をしたり、わずかだけれど歩くこともできた。でも、それはまた家族にとつて、日に五、六回の発作とのたたかいを意味していた。

今は薬のおかげで生傷を作るような発作はなくなったけれど、その代わり顔やからだから元気が消えて、朝から晩までうつらうつらしている。どちらがよかったのか、わたしにも家族にもわからない。でも、あの激しい発作がつづいていれば、看病してくれるお母さんも家族も、過労で倒れたり、わたしも打ちどころが悪くて、それがもとでぐあいをもっと悪くなる危険だってあったはず。そう考えれば、寝たきりも、まあ悪くないか、というところだ。

夕食は六時。やはりベッドで、おかゆにきざみ食。刺激の強いものはもち

ろん、辛いものも甘いものも食べることができない。お母さんはそんな食材をていねいに取りのけて、わたしだけの夕飯を作ってくれる。これはいわば、わたしのダイエット・メニュー。運動ができないわたしの骨は細くてもろいので、太ると体重を支えきれなくて骨折するおそれがある。もし虫歯にでもなったらお医者さんにかかるのは一大事。だから、食事にはかなり神経質になつてしまうのだ。

わたしが感じることでできる痛みは、頭痛と歯痛と腹痛の三つだけ。泣いているときは、このどれかが痛いときだ。他のところは神経がマヒしてしまつていて、痛みを感じないのだから。

八時ころ、一日のうちで最大のイベント、*「ニューヨーク・タイムズ」*がはじまる。

お母さんが、いつものように「よっころしよつ」と掛け声をかけてわたしを抱き上げ、おふろ場に連れていく。お父さんや弟たちが連れていつてくれ

ることもあるけれど、シャワーを使って、歯をみがいたり、からだを洗ってくれるのは、やつぱりお母さんの専売特許。平衡感覚がないから、わたしは赤ちゃんのようにすつかりお母さんの腕のなかで、されるままになつている。もたもたしていると肺炎を起こしかねない。体重ウン十キロのわたしをかかえての入浴は、お母さんにはいちばんきつい仕事。

ところがお母さんつたら、

「なつちゃんをおふろに入れるようになってから、お母さん、筋肉がついちやつて、ほら、こんなになつちやつたわよ。」

と、張り出したヒップをベタベタたいてみせて、自分が太つたのをわたしのせいにする。

——それはないでしょう？　いわせてもらいますけど、お母さんが太つてるのは食べすぎよ。筋肉なんて関係ないんじゃない？　わたしのせいにするなんて！

といたいけれど、わたしにはことばがない。

おふろからあがると、お母さんはやつとわたしから解放される。

「おやすみ、なっちゃん。また明日ね。」

——おやすみなさい、お母さん。

明かりが消える——部屋は静けさと暗やみのなかに沈んでいく——。

まもなくわたしは深い眠りに落ちていくのだけれど、それまでのひととき、まるで、映画館の明かりが消えるとカタカタと回りはじめる映写機のように、わたしの心のスクリーンに、家族ひとりひとりの記憶が^{よぎ}つきつきと浮かび上がってくる……。

仲よしの弟大輔^{だいすけ}と手をつないで、スキップしながら通った保育園——

おばあちゃんのおひざの上で読んでもらったたくさんさんの絵本——

やさしい笑顔でおしゃべりしながら車いすを押してくれるお父さん——

車で、どんな遠くへでも「おやすいごよう」と連れていってくれたおじいちゃん——

いくらじゃれついても反応しないわたしに、ふしぎそうな顔を向ける末っ子の裕介^{ゆうすけ}——

その裕介を、お母さんに代わってみてくれるおばちゃん（お父さんのお姉さん）——

そして、いつもわたしの近くにいて、大声で話しかけたり笑ったりしているお母さん——

家族ひとりひとりの笑顔がわたしの心いつばいに広がり、やがて頭のうしろのほうから波が引くように遠ざかっていくと、ようやく深い眠りが訪れる。